

民族文化の商品化とショー・ビジネス

—雲南省、吉鑫宴舞の事例から—

文教大学 長谷川清

1. 問題の所在

中国では1980年代以降、改革開放政策の影響を受け、諸民族の風俗習慣やエスニックな民族／民俗文化を資源として活用する観光化が進行した。こうした動きは「文化の商品化」として興味深い現象でもあったが、少数民族が多く居住している観光地では、民族歌舞ショーを上演する観光村や劇場、民族料理のレストラン（民族餐廳）が多く出現し、観光客を呼び集めるスポットになった。

雲南省昆明市の「世博吉鑫園」において上演され、雲南の少数民族の多彩な民族歌舞が鑑賞できるエンターテイメント・ショーとして人気を集めた《吉鑫宴舞》はその典型的な事例である。この歌舞ショーは雲南省の歴史や伝説、恋愛や婚姻習俗といった少数民族の伝統的な生活文化を題材にして創作された舞台芸術であったが、観客たちは雲南各地の多種多様なローカルフード（滇味、滇菜と呼ばれる）とエキゾチックな「民族風情」を同時に堪能できた。こうしたエンターテイメント・ショーの鑑賞と飲食が結びついた消費のかたちは「歌舞伴餐」と呼ばれ、中国各地で1990年代以降に普及した。

本報告は、《吉鑫宴舞》がどのような社会的・経済的・文化的状況において出現し、ショー・ビジネスとしていかなる経過をたどって発展し、雲南省における文化産業の成功例とみなされるまでになったのか、初歩的な考察を試みたい。

2. 雲南省における文化産業の発展

中国の観光業において諸民族の歴史・伝説や民間舞踊、民俗的慣行などに題材をとったエンターテイメント・ショーは「旅游歌舞」や「旅游演艺」の重要な位置を占めているが、2000年代に入ると民族歌舞ショーの上演は各地で流行し、舞台芸術としての大型化が進んでいく〔王偉年2009〕。「民族文化大省の建設」という発展戦略を1996年に打ち出した雲南省では文化体制改革を推進し、歌舞団や舞踊チームが民間でも組織され、積極的な活用が行われていくことになる。

省都の昆明や石林（サニ族）、麗江（ナシ族）、大理（ペー族）、西双版纳（タイ族、ハニ族、ジノー族）、紅河（ハニ族）などの民族観光のスポットではホテルやレストラン（餐厅）では「歌舞伴宴」が流行したが、改革開放と市場経済の拡大するなか、目新しさも手伝って多くの人々が魅了され、観光業の発展にも貢献した。そればかりでなく、経済フォーラムや物産交易会、商談会などでも民族歌舞ショーの文芸晩会を行なうようになった。こうした文化イベントの開催は、ビジネス関係者同士の交流やコミュニケーションを促す重要な役割を果たしたのである。

当時さかんに唱えられたスローガンに「文芸搭台、経済唱戲」（文芸が舞台を組み、経済が劇を演じる）があるが、こうした言い回しは市場経済・ビジネスと文化的消費が緊密に関係を持ち始めたことを含意しているが〔施惟達等 2011〕、「世博吉鑫園」が創業した民族歌舞のショー・ビジネスはこうした市場経済の加速化や観光市場の拡大化を基盤にしていたのである。

3. 雲南吉鑫集団の発展過程

《吉鑫宴舞》は「雲南吉鑫集团股份有限公司」（以下、雲南吉鑫集団と略する）の系列下にある「世博吉鑫園」が創作した、エンターテインメントとしての舞台芸術である。まず、この企業集団の成立過程をまず見ておこう。雲南吉鑫集団の前身は「吉鑫園」という過橋米線を客に提供する専門店であり、1990年に遡ることができる。

「過橋米線」とは、雲南省に由来するローカルな麺料理の一種で、煮えたぎったスープと油が入った磁器の碗または土鍋に「米線」（ミーシェン）のほか、鶏肉、ハム、うずら卵、豆腐皮（湯葉に似た豆腐加工品）、野菜などを入れて食べる。昆明市内だけでも多くの店舗があるが、1990年9月、南華街に「吉鑫園」が開店した。

創業したのは白族出身の李麟という人物である。彼は従業員に民族衣装を着せ、「民族特色」に売りにして他店との差異化を図ったが、食器や店内の衛生管理にも注意を払ったこともあり、専門店として客の心をつかむことに成功した。その経営は順調で分店も増えていったが、李麟はさらなる営業範囲の拡大をめざし、「吉鑫企業発展総公司」を設立する（1993年5月）。彼の経営方針はユニークであり、雲南の「民族文化」の称揚と料理・食文化（滇味）の振興を謳いつつ、民族歌舞ショーとレストラン経営を結びつけるものであった。そのための店舗として「吉鑫園滇味城」を開店し、店内に大型の舞台装置を作って少数民族の青年男女による民族歌舞ショーを上演した（1994年9月）。

その後も李麟は企業活動を拡大し、「吉鑫企業発展総公司」を「雲南吉鑫集团股份有限公司」へと再編するが、レストラン経営だけでなく観光やハイテクによる教育産業の分野

にも進出していくのである（1998年5月）。こうした雲南吉鑫集団の急成長は当時、文化産業の成功事例として大きな反響を呼んだ。

李麟はさらに大きなチャンスを手にした。それは昆明市で開かれた「世界園芸博覧会（略称は世博会）」（1999年4月開幕）であった。江沢民が開幕式のレセプション（国宴）を主催したが、その会場に指定されたのが「世博吉鑫園」である。この大型の宴会場「国宴廳」と命名された。2005年には温家宝がアセアン諸国などの元首を招待して開催したGMS会議のレセプション会場になり、雲南省の文化産業を先導するブランド企業として知名度を上げていった（1）。

4. 吉鑫宴舞の創作

李麟は、《吉鑫宴舞》を世界の3大「YAN」舞の1つであると説き、観光のガイドブックやパンフレットなどを用いて宣伝活動に努めた。彼の独創性は、3大「YAN」舞として、パリのムーランルージュの「艶舞」（夜総会式）、タイ国においてリゾート観光のメッカとなっているパッタヤーのニューハーフ（中国語では「人妖」）ショーの「燕舞」（劇場式）と並べて、《吉鑫宴舞》は中国の長い伝統を有する「宴舞」（宴会式）であるとした〔満子 2000〕。

中国語では艶舞はセクシーな内容を持つダンスの総称を指すが、李麟は伝統あるムーランルージュのキャバレーショーこそがその代表作であるとする一方、バンコク近郊のリゾート観光の一大拠点であるパッタヤーのニューハーフショーにも焦点を当てた。李麟はこうした世界的に知名度のあるショー・ビジネスの系列に《吉鑫宴舞》を並べて、雲南少数民族の文化資源を利用し、ブランド化と特色化を図った〔張楠 2003〕。

2004年4月10日、《吉鑫宴舞》は昆明で国際旅游フェスティバルが開催された際、盛大に披露された。その後、内容の改訂と舞蹈作品の創作が追加され、「南詔宮宴」、「滇人羽舞」、「雪域春風」、「秘境馬帮」、「高原霓裳」、「聖潔祝福」、「高原盛会」、「七彩雲霞」などの舞台作品が創られていった。これらの舞台作品はそれぞれ独立した内容を有するが、古代雲南の滇国や南詔国の歴史・風俗、少数民族の民間舞蹈、風俗習慣や生活文化などに発想を得て創作されている。「世博吉鑫園」では5幕編成で上演されたが、これらの演目を組み合わせたものであった（2）。

《吉鑫宴舞》の創作において指導的な役割を演じたのは疆嘎という人物である。彼は国家一级の舞蹈振付師（編導）として雲南省舞蹈協会において指導的な地位にあったが、「雲南吉鑫宴舞演芸有限公司」の総経理も務めた。2000年に第1回の昆明国際旅游フェス

ティバルで発表された《吉鑫宴舞》の演出を担当したが、その後もこの舞台作品の改作に関わり、2007年にはその新バージョンを発表した（3）。

新バージョンの構成は、第1幕「南詔宮宴」、第2幕「秀色可餐」、第3幕「花腰風情」、第4幕「聖潔祝福」、第5幕「七彩雲霞」である。第1幕は南詔王の宮廷演会の場面を表現したものである。舞台中央の上部に「太平盛世、歌舞昇平」の文字を掲げ、南詔王が威厳をもって登場した後、奉聖樂舞、大褲脚舞、甩髮舞、龜茲樂舞などが演じられるほか、周辺諸国の使者との謁見の場面が演じられる。

第2幕はイ族、ジンポー族、ワ族、タイ族（花腰傣）などの舞踊、第3幕はイ族（花腰傣）の「海菜腔」や「烟盒舞」などの舞踊が演じられる。第4幕は主にタイ族の「檀伽舞」、「穿灯舞」などがある。最終章の第5幕は民族衣装のファッションショーである。様々な衣装をまとった男女のモデルが次々と登場して舞台に華やかな彩りを演出し、最後に勢ぞろいしてフィナーレを迎えるというものである。

中国の歴史において、皇帝の権力と威光を背景として宮廷で演じられた樂舞は、後代の人々からすれば、想像力を駆り立てられる中華文化の「伝統」である。《吉鑫宴舞》の場合、その舞踊ショーに歴史的な厚みを持たせる手法として、古代滇国の風俗や南詔国の「南詔奉聖樂」（南詔王の異牟尋が唐王朝に献じた宴饗樂）と関連づけられ、こうした雲南文化の歴史性を付与した演出によって《吉鑫宴舞》のブランド化や特色化が図られる点に最大の特徴がある。このほか、雲南の少数民族の伝統的な舞踊（例えば烟盒舞）や新たな舞台作品をふんだんにもりこみ、歌舞ショーとしての娯楽性が追求されているが、都市の消費文化としての性格を帯びている〔于漪 2013〕。

5. 今後の課題

舞台芸術としての《吉鑫宴舞》の作品内容を知ることができる資料には、DVDやYouTubeなどにアップロードされた動画、観光行政の関係者、旅行・グルメ関連の企業関係者、個人旅行者によるブログがある。特に、ブログは舞台上で繰り広げられる数々の舞踊作品や食事・観劇風景、施設内のインテリア・展示物、吉鑫宴舞のメニュー、パンフレット類などを記録している点で貴重である（4）。雲南吉鑫集団は昆明以外の観光地（麗江、大理、西双版纳など）でも観光客向けの舞台芸術の創作にかかわっており、これらのショー・ビジネスの実態については今後のさらなる調査研究が必要である。

注

- (1) 『雲南日報』の記事を掲載した以下のウェブサイトを参照。①「吉鑫：舞動昆明文產龍頭」<http://ent.sina.com.cn> (2006年10月17日) 『雲南日報』
<http://ent.sina.com.cn/x/2006-10-17/09591287643.html>、②「李麟：文化産業首先是个創意産業」<http://ent.sina.com.cn> (2006年10月08日) 『雲南日報』
<http://ent.sina.com.cn/x/2006-10-08/09281274759.html>、③「国内頂尖芸術大師傾力打造新版《吉鑫宴舞》盛装出閣」<http://www.sina.com.cn> (2007年01月18日) 『雲南日報』
ent.sina.com.cn/x/2007-01-18/09531416317.html (最終閲覧日 2021年10月25日)。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 「疆嘎的博客」<http://blog.sina.com.cn/jianggablog> を参照 (最終閲覧日 2021年10月25日)。
- (4) 例えば、以下のブログでは新バージョンの《吉鑫宴舞》の写真記録を多数紹介している。①黄安年「体験“吉鑫宴舞” (2007年4月21日) (一)」
<http://blog.sciencenet.cn/blog-415-2125.html>、②同「体験“吉鑫宴舞” (2007年4月21日) (二)」 (2007年5月16日)、<http://blog.sciencenet.cn/blog-415-2127.html>、③沐風听雨·天涯「行走雲南之《千年蝶梦色中游》」 (2007年12月12日) <http://blog.sina.com.cn/hwb121> (以上、最終閲覧日 2021年10月25日)。

参考文献

- 満子 2000 「飽含民族文化的吉鑫宴舞」『民族工作』2000年5期：48-49頁。
- 施惟達等著 2011『文化与經濟：民族文化与産業化發展』昆明：雲南大学出版社。
- 王偉年 2009「我国旅游演艺发展的驅動因素分析」『井岡山大学学報（社会科学）』2009年4期：87-91頁。
- 于漪 2013「民族歌舞的都市化景觀—以《吉鑫宴舞》为例」『學術探索』2013年2期：131-135頁。
- 張楠 2003「吉鑫集团公司的特色發展道路」張徳文・納麒主編 2003『2002～2003 雲南文化發展藍皮書』昆明：雲南大学出版社、373-378頁。